

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：18001

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K00151

研究課題名(和文) 沖縄経験 を軸とした戦後沖縄写真に関する表象文化の発展的研究

研究課題名(英文) Researches and archives of Okinawan Photography in post war times according to Okinawa Experience.

研究代表者

小屋敷 琢己 (Koyashiki, Takumi)

琉球大学・教育学部・教授

研究者番号：20404551

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、戦後沖縄における写真家の資料を整理・保存することを通じて、その資料の歴史的・社会的意義を明らかにし、関連する文献や資料を収集・分析することによって、沖縄写真史及び戦後沖縄思想史における独自の価値を解明することを目的とした。また、資料特にネガを使ったプリントによって美術展などの展示企画に参加し、写真の意義を社会的・地域的に還元することができた。

さらに、研究成果を、学術誌だけでなく、新聞や雑誌等にも掲載し、広く一般の関心と呼ぶことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

戦後の沖縄写真史において、比嘉康雄は写真家として認められているが、阿波根昌鴻は、未だ写真家としては認められてこなかった。従来は比嘉と阿波根との関わりには注目されてこなかったけれども、本研究によって、両者の関連が明らかとなり、その写真及び思想の関連性について論じることができるようになった。また、阿波根の資料の中で写真ネガを整理・保存することによって、そのプリントを活用することができるようになり、これをデジタル化し、プリントを展示する展覧会を複数回実施することができるようになったのも、大きな成果である。近年、阿波根が写真家として広く県内外で認知されるようになってきたのは、大きな社会的意義がある。

研究成果の概要(英文)： Purpose of this research is that will define the post war Okinawan Photography is very important media: and archive the documents of the post war Okinawan peoples thought.

Results of this studies are (1) Archives of documents of Okinawan photo and people intellectual history; (2) Reading a paper of the post war Okinawan photo at the meeting of Society, and Publishing the dissertation; (3) Reporting the article of Okinawan photo in okinawan newspapers, and Participation to project of exhibition of Okinawan photo.

研究分野：哲学・思想史

キーワード：沖縄写真 沖縄経験 アーカイブズ

1. 研究開始当初の背景

本研究は、戦後の変容する沖縄社会をカメラとペンで記録した阿波根昌鴻（平和運動家 1901 - 2002）と比嘉康雄（写真家 1938 - 2000）を対象に、写真という「表現活動」の背景にある彼らの沖縄経験に焦点を当て、戦後沖縄写真の特質の一端を明らかにすることを目的とする。研究の遂行にあたり、二人の撮影メモや日記、手紙などの関連資料をアーカイブズ資源と位置づけ、その内容分析から、沖縄経験がどのように「表現活動」と結びついたかを検証する。近年、アーティストと市民が一体となったアート・プロジェクトが盛んに展開される沖縄で、本土と異なる地域固有の表現に着目した本研究は、今なお沖縄に横たわる諸問題に対する理解の深化に寄与するものである。

2. 研究の目的

本研究の目的は、阿波根昌鴻と比嘉康雄の沖縄経験に焦点をあて、これらが写真という「表現活動」とどのように結びついたかを分析し、表象文化の文脈の中で戦後沖縄写真の特質を明らかにすることにある。そのために、彼らによって撮影された写真（未公表も含む）に加え、これまで参照されてこなかった撮影メモ、日記、手紙などの関連資料をアーカイブズ資源として整理し、これらを一次資料として積極的に参照することで、彼らの沖縄経験と、オキナワイメージという本土側から沖縄に対する眼差しについて分析を行なう。

このアーカイブズ資源によって鑑賞者の作品理解に資する展示を企画することで、研究成果のアートの場への還元を目指す。鑑賞者が「表現活動」の根底にある沖縄経験を受け止められる展示の場を創出することで、「表象としての沖縄写真」と、今に続く沖縄の諸問題に対する理解の深化に寄与することが、本研究の最終目標である。

3. 研究の方法

本研究では、阿波根昌鴻と比嘉康雄の写真とのかかわりを踏まえて、以下の3つの研究課題を設定し、発展的に研究をすすめていく。

【第1課題】アーカイブズ資源化のための整理：阿波根昌鴻・比嘉康雄の遺族らによって保管されている未公表の写真、撮影メモ、日記、手紙などの関連資料について、将来的な公開・活用に備えるため、整理・保存作業を行なう。阿波根昌鴻の資料は、一般財団法人わびあいの里で保管されている。これら資料群の整理は、当該研究代表者も（2005年から）参加する阿波根昌鴻資料調査会が2002年より着手しているが、「集めるということは、一つの楽しみ」という阿波根の言葉の通り、集められた膨大な資料の多くは未整理であり、特に写真活動に関わる関連資料の全貌は未だ把握できていない。比嘉康雄の資料は、比嘉アトリエにおいて、未公表写真、撮影場所や対象物に関する情報、被写体の聞き取り記録、日記、ネガ等が遺族の手で管理されている。これらすべてを限られた研究期間内で整理することは難しいため、本研究では、未公表写真と撮影記録、日記、手紙といった、阿波根と比嘉本人によって作成されたものに限定し、アーカイブズ学的手法に基づいて、研究協力者とともにリスト作成、保存手当及びデジタル化をすすめる。なお、本研究では整理対象に含めない資料についても、長期的には整理・保存の対象から除外せず、将来的には資源化を目指す。

【第2課題】<沖縄経験>の検証：第1課題と並行して、関連資料を分析しながら、二人の沖縄経験や沖縄に対する意識について検証する。阿波根は米軍による土地の強制収用を経て、沖縄をめぐる基地問題と対峙した。比嘉は沖縄の現実を見つめる眼差しをもって、沖縄文化の古層となる祭祀に向き合った。重なり合う時期に沖縄社会を生きた阿波根と比嘉であるが、「沖縄戦と敗戦経験」、「占領経験」、「復帰経験」が重層的に横たわるなかで形成された両者の沖縄経験は位相を異にしている。それぞれの経験の諸相を明らかにすることで、これらがどのように「表現活動」へと結実したのかを、戦後沖縄写真の特質という観点から検証する。

【第3課題】アートの場への還元：第1課題と第2課題で得られた成果を踏まえ、アーティストと市民との協働によるアート展を企画し（沖縄アジア国際平和芸術祭2020など）、アーカイブズ資源を活用した展示を行なう。戦後沖縄写真という文脈において、二人の沖縄経験と「表象としての写真」の今日的意義を提示し、展示内容に反映する。

4. 研究成果

[令和2年度]

本研究は、アメリカによる占領、日本への復帰など、戦後の変容する沖縄社会をカメラとペンで記録した阿波根昌鴻と比嘉康雄を対象に、写真という「表現活動」の背景にある彼ら

の 沖縄経験 に焦点を当て、表象文化の文脈の中で戦後沖縄写真の特質の一端を明らかにすることを目的とする。研究の遂行にあたり、【第1課題】アーカイブズ資源化のための整理、【第2課題】の検証、【第3課題】アートの場合の還元の3つの課題を設定した。

初年度となる本年は、【第1課題】としては、わびあいの里（沖縄県伊江村）及び比嘉康雄アトリエ（沖縄県沖縄市）にて、阿波根昌鴻と比嘉康雄の資料を対象とした整理・保存作業の実施を計画していたが、コロナ禍のため当初の予定よりも大幅に制約された。比嘉康雄資料に関しては、感染状況に留意しつつ出来る限りの感染症予防対策を講じることで実施できたものの、阿波根昌鴻資料については、離島である伊江村への渡航制限もあり、今年度の実施に至らなかった。ただし、阿波根昌鴻資料に関連する資料を、北九州市立文学館にて火野葦平資料調査として実施することができた。

【第2課題】に関しては、資料調査で得たデータに加え、これまでに収集してきた関連資料や著書、写真集、新聞記事などについて内容分析をおこなってきた。また、その一部の成果を、学会やシンポジウム等で報告した。また、沖縄経験 に関連する上野英信による『眉屋私記』の資料調査も実施した。

【第3課題】については、「沖縄アジア国際平和芸術祭」の関連企画として、『沖縄の縮図 伊江島の記録と記憶 阿波根昌鴻写真展』（佐喜眞美術館）及び『イザイホーの魂/久高のニガイ 比嘉康雄・上井幸子写真展』（那覇市民ギャラリー）を実施した。この企画に関しては、研究代表者による新聞記事での紹介を掲載することもできた。

[令和3年度]

本研究の【第一課題】としては、わびあいの里（沖縄県伊江村）及び比嘉康雄アトリエ（沖縄県沖縄市）において、阿波根昌鴻資料と比嘉康雄資料の整理・保存作業をおこなうことを計画していた。これは、前年度同様、令和3年度においても、コロナ禍という想定外の状況のもと、当初の予定よりも大幅に制約されることとなった。しかし、感染状況に留意しつつ感染対策を十分配慮しながらも、比嘉康雄資料に関しては、ある程度整理・保存の作業を実施することができた。また、比嘉康雄と関係のある方から聞き取りの調査、広島にて原爆文学の作家資料等のアーカイブズ資源化に関わる情報収集等の調査も実施した。阿波根昌鴻資料調査については、伊江村への渡航制限が解除されて以降、限定的に実施することができた。また、阿波根昌鴻資料に関連する資料について、国立国会図書館にて新聞資料調査や大宅壮一文庫にて雑誌資料調査をすることができた。

本研究の【第二課題】として、沖縄経験 の検証を計画していた。これは、第一課題によって得られた資料について内容分析し、あるいは既存の公刊された著書や論文、新聞記事などと関連させて、阿波根昌鴻や比嘉康雄らの意識や思想について理解を深め、また同時代的な知識人等との関係性も含め、戦後の沖縄経験史のなかに位置づける作業である。また、沖縄経験 に関連する、上野英信による『眉屋私記』の資料調査も一部実施することができた。

さらに本研究の【第三課題】として、アートの場合の還元を計画していた。これについては、伊江島写真展実行委員会のメンバーとして、写真展のための調査及びスキニング作業を実施し、『島の人々 戦後伊江島・阿波根昌鴻写真展』（伊江村はにくすにホール）が開催され、2月19日にはシンポジウムで研究代表者による報告もおこなった。この企画については、新聞に記事が掲載された。

[令和4年度]

本研究【第一課題】として挙げた、阿波根昌鴻資料調査（沖縄県伊江村）に関しては、新型コロナウイルスによる感染状況の推移のため、当該年度は、協同して参加している阿波根昌鴻資料調査会は、伊江村での全体での実施が見合わせられてきており、部分的には各グループ（目録班、蔵書班）に分かれて、資料を伊江村外に持ち出せる分は数回実施がなされてきたが、本研究の調査対象である写真資料（ネガ等）は、わびあいの里により伊江村外への持ち出しを制限していることから、現地での調査を実施することができなかった。阿波根昌鴻資料及び戦後沖縄史と関連する調査研究としては、国立国会図書館、沖縄県立図書館などで、主に戦後新聞資料（朝日新聞、琉球新報、沖縄タイムス等）を調査し、必要な箇所のコピーを収集した。また、この資料の分析を行った。また、戦後の文化運動に関わる展示の視察も行った（町田市立国際版画美術館、直方谷尾美術館、田川市美術館、飯塚市歴史資料館、中津市立小幡記念図書館）。あわせて、デジタルアーカイブの取組について聞き取りも行った（「炭都の記憶」関連写真データベース）。

本研究【第二課題】として挙げた 沖縄経験 の歴史的検証では、沖縄経験 と関連する戦後表象文化として、沖縄移民のルポルタージュ『眉屋私記』の著者・上野英信（筑豊

文庫)の資料調査の一環で、資料の保存状態の調査を実施した。

また、戦後 沖縄経験 と関連する文化人として火野葦平がおり、その残した資料について令和2年度に引き続き、北九州市立文学館にて、1954年に火野が撮影した311コマのネガをスキャンし、デジタルデータとして保存・整理の作業を実施した。

さらに、これまで収集・整理してきたデジタルデータ(阿波根昌鴻資料)を、メディアの要請に従って、権利者であるわびあいの里の依頼の元で提供を行ってきた(『沖縄タイムス』2023年1月10日付~1月24日付)。

[令和5年度]

当該研究の最終年度である2023年度は、主に調査研究活動を実施しながら、その成果をもとに研究の発表に注力した。まず、戦後資料調査として、新聞や雑誌、書籍等の調査・収集を、国会図書館等で行った。また写真の展示等の視察も実施し、写真表現の多様性について見識を深めた。沖縄県伊江村での阿波根昌鴻資料調査は、コロナ禍において中断を余儀なくされていたが、当年度から再開し、資料調査活動を実施した。

こうした調査・研究活動により得られた成果をもとに、新聞(沖縄タイムス及び毎日新聞西部本社版)にその一部が紹介された(火野葦平写真資料)。また、日本オーラルヒストリー学会第21回大会にてシンポジウム「沖縄をめぐる占領体験をどう書くか/そう聞くか:実践的身振りに目をとめる」で、パネリストとして報告を行った(学会誌掲載予定)。

本科研費による研究は、2020年度~2023年度の4年間で、第1課題「アーカイブズ資源化のための整理」、第2課題「沖縄経験の検証」、第3課題「アートの場への還元」を設定した。【第1課題】としては、財団法人・わびあいの里(沖縄県伊江村)及び比嘉康雄アトリエ(沖縄県沖縄市)にて、それぞれ阿波根昌鴻資料、比嘉康雄写真資料の整理・保存作業を実施してきた。また、北九州市立文学館にて火野葦平資料や森崎和江資料の調査も行ない、新発見の写真資料のデータをデジタル化することができた。

【第2課題】としては、収集してきた書籍、新聞雑誌等の資料を分析することで、学会や展覧会でのシンポジウム等で報告をすることができた。さらに第3課題としては、「沖縄の縮図 伊江島の記録と記憶 - 阿波根昌鴻写真展」(佐喜眞美術館、2020年)、「イザイホーの魂/久高のニガイ - 比嘉康雄・上井幸子写真展」(那覇市民ギャラリー、2021年)、「島の人々 - 戦後伊江島・阿波根昌鴻写真展」(伊江村、2022年)などに企画参加した。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 小屋敷琢己（比嘉豊光氏との対談記録）	4. 巻 1
2. 論文標題 「 沖縄写真 史を捉え返す 阿波根昌鴻・写真の再評価 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『沖縄アジア国際平和芸術祭2020』すでいる・琉球プロジェクト	6. 最初と最後の頁 66 - 73
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小屋敷琢己	4. 巻 第9号
2. 論文標題 「 写真家・阿波根昌鴻のはじまりと比嘉康雄 復帰20年から復帰10年へ 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『時の眼 - 沖縄批評誌N27』琉球プロジェクト	6. 最初と最後の頁 86 - 97
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高科真紀	4. 巻 第29号
2. 論文標題 「 写真メディアを軸とした沖縄祭祀アーカイブズ 写真家・比嘉康雄資料を事例に 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『アート・ドキュメンテーション研究』	6. 最初と最後の頁 3 - 16
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 高科真紀	4. 巻 4
2. 論文標題 「 地域の記憶とアーカイブズ：民間所在資料調査の現場から 」	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 『REKIHAKU』	6. 最初と最後の頁 84 - 86
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 小屋敷琢己
2. 発表標題 「写真家としての阿波根昌鴻 × 比嘉康雄 × 平良孝七」
3. 学会等名 復帰50年にむけて考える 戦後沖縄写真の軌跡 シンポジウム
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高科真紀
2. 発表標題 「戦後沖縄写真史の再構築におけるアーカイブズの可能性」
3. 学会等名 復帰50年写真展へ向けた戦後沖縄写真史の再構築事業第5回研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高科真紀・阿久津美紀
2. 発表標題 「写真メディアを軸とした沖縄祭祀アーカイブズ - 写真家・比嘉康雄資料の目録記述と権利処理 - 」
3. 学会等名 アート・ドキュメンテーション学会2020年度年次大会，オンライン開催
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 高科真紀
2. 発表標題 「久高島・まつりの記憶と記録 - 比嘉康雄アーカイブズ整理の現場から - 」
3. 学会等名 イザイホーの魂 / 久高のニガイ 比嘉康雄・上井幸子写真展シンポジウム、琉球新報ホール（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 小屋敷琢己
2. 発表標題 沖縄経験 と表象文化 / 記録と表現のあいだ - 火野葦平から阿波根昌鴻へー
3. 学会等名 日本オーラルヒストリー学会第21回研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分担 者	高科 真紀 (Takashina Maki)	国立歴史民俗博物館・大学共同利用機関等の部局等・特任助教	
	(10723207)	(62501)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------